



編集・発行

大阪府立

呼吸器・アレルギー医療センター

大阪府羽曳野市はびきの3丁目7-1

TEL: 072-957-2121

FAX: 072-958-3291

HP: <http://www.ra.opho.jp>

E-mail: kokyucen@ra.opho.jp



感染症発生動向調査（今冬は感染性胃腸炎にご注意）

診療局長 ささべ てつお
笹部 哲生

1999年に“感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律”が施行され、全国的に感染症の発生動向調査が行われるようになりました。本調査では、感染症を1類から5類までに分類し、4類までのすべての感染症と5類の一部を全数把握の感染症とし、診断したすべての医師は、直ちに（5類は7日以内に）最寄りの保健所に届ける義務があります。5類の残りの感染症は、あらかじめ決められた定点医療機関で1週間（一部は1か月間）に来院した患者数を一括して保健所に届け出ます。これらの疾患を定点把握感染症といい、インフルエンザ、感染性胃腸炎などはここに含まれます。大阪府は大阪市、堺市、東大阪市、高槻市、豊中市と綿密な協力のもと、週1回小委員会をひらいて、府内での感染症発生動向の報告や流行に対して注意喚起などをしております。当院は内科定点、小児科定点、眼科定点、基幹病院定点として同事業の活動に協力しております。

ところで、今年の冬の感染症の発生動向では、感染性胃腸炎が要注意です。感染性胃腸炎は、2006年に介護施設や保育所などでの集団発生が問題となり、ノロウイルスやロタウイルスを主たる病原とする感染症であることが連日報道されて、ご記憶もあろうかと思えます。本年は10月から急激に患者数が増加し、最近少し落ち着きましたが、大阪府内でノロウイルスによる集団発生事例が多数報告されています。嘔吐、下痢、腹痛などが主たる症状で、感染経路はカキなどの貝類からがよく知られていますが、患者さんの便や吐瀉物への接触による二次感染が流行の原因になります。身近に感染者がおられるときは、不潔になった物を直接手で触れることのないよう塩素系の漂白剤で消毒し、感染拡大の防止に努めてください。

子どもは風の子

小児科主任部長 どい さとる
土居 悟

近年、吸入ステロイドなどの抗喘息薬の開発と普及によって、子どもの喘息治療は劇的に進みました。すなわち、抗喘息薬を普段からきちんと使っていると、喘息発作は起こらないか、起こっても軽くすむようになりました。しかしながら、今でも、風邪ひきがきっかけで喘息症状が悪化することがあります。喘息の子どもの約9割は、家のほこりなどにアレルギー反応を起こしますが、風邪もひきやすく、また風邪が治りにくいことも知られています。喘息の人では、風邪の原因ウイルスで最も多いライノウイルスにかかった時に、ライノウイルスと戦うインターフェロンの産生が低いというデータがあります。



このことから、喘息の子どもでは、家のほこりなどのアレルギーを引き起こす原因物質を少なくすることとともに、普段発作がない時にしっかりと体力作りをするということもよいこととなります。心身の鍛錬ということは、風邪をひきにくくするというので、理にかなっています。同時に子どものいる所では、タバコの煙は厳禁です。タバコの煙は、喘息をおこしやすくする、治りにくくする、抗喘息薬を効きにくくします。このように、子どもの喘息では必要なお薬を忘れないようにすることと同時に、日常生活面での配慮も重要です。子どもは「風邪の子」ではなく「風の子」で、外で元氣よく遊んでほしいものです。

<薬局の紹介シリーズ⑫>DOTS（ドッツ）について

薬局 いわた ひろゆき
岩田 浩幸

結核は結核菌によって引き起こされる感染症です。

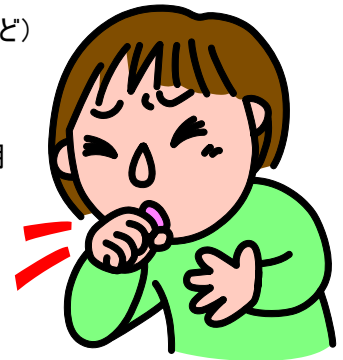
現在ではたくさんの薬が開発され、特殊な結核（ほとんどの薬が効かない多剤耐性結核など）をのぞいて、薬で治療することができます。

しかし、結核菌は一部が休眠状態で薬に抵抗し体内に残存するため、6ヶ月以上の長期間（患者さんの状態や薬の種類でさらに伸びる場合があります）服薬しないと再発します。また、万が一、ある薬が効かない結核菌が体内に発生しても、残りの薬でやっつけられるよう数種類の薬を併用するのが原則です。

多数の薬を長期間服用しなければならないため、高齢や社会的問題・副作用などさまざまな理由で服薬の継続が困難になる場合があります、途中で薬を飲むのをやめてしまうなど治療が不十分に終わり、結核を再発してしまうケースがあります。

DOTS（ドッツ）とはWHO（世界保健機関）が提唱する結核の治療率を上げることを目的とする結核対策戦略のことです。当センターにおいても、医師・看護師・薬剤師などの病院スタッフと保健所の保健師が連携して、入院中および退院後も薬を確実に服用できるようサポートしています。その中で薬剤師は、服薬指導や結核教室を通じて、長期にわたり確実に服薬する必要性や注意すべき副作用を説明しています。さらに退院前には病院スタッフと保健師が、それぞれの患者さんが治療を継続するためにどのような支援が必要か検討しています。そして、必要に応じ薬の一包化を行い、退院後も間違いなく確実に服薬していただけるよう取り組んでいます。

日本の結核罹患率は先進国の中でも高く（平成23年の新規結核患者数は人口10万人あたり17.7人）、決して過去の病気ではありません。当センターでは、結核治療の専門病院としてDOTS（ドッツ）を通じて一人一人の患者さんが治療を完遂できるよう取り組んでいます。



12月の教室案内

*カンガルー教室	●12月5・12・19日	午後1時～	第1会議室
*禁煙教室	●12月6日	午後3時30分～	医療情報コーナー
*喘息教室	●12月20日	午後1時45分～	第2会議室